

自己愛傾向がソーシャルサポートの認知に及ぼす影響

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
加藤 仁

対人関係上の不適応状態へ至るプロセスにおいて、高自己愛者に対して適切なソーシャルサポートの提供の可能性を考えることは、受診行動の促進も含めて予防的介入の観点から重要であると考えられる。自己愛傾向の高い者が適切に周囲からのサポートを得るためには、周囲にソーシャルサポートが存在することが重要である。同時に、それを利用可能であると本人自身が認識している必要がある。そこで本研究では、自己愛がサポート認知に及ぼす影響とその具体的文脈を確認するために、場面想定法を用いた質問紙実験と、面接調査を行った。

研究1では、自己愛傾向がサポート認知を予測する程度と、自我脅威状態におけるサポート認知に自己愛傾向が与える影響について確認するために、自己愛傾向 サポート認知(T1)、自己愛傾向 サポート認知(T2)の2点について重回帰分析を用いて検討した。その結果、サポートの利用可能性の認知を示す「入手可能性」の重回帰分析におけるは有意ではなく、自己愛傾向がサポートの利用可能性の認知を予測するという仮説1は支持されなかった。しかし、その他の認知変数に自己愛の及ぼす影響から自己愛の誇大的な特徴を観測できた。また自我脅威条件・統制条件の両条件において、自己愛傾向の高さはサポートの「欲求度」、「心理的な負債感」の認知の程度の低さに影響を与えていたため、自我脅威を受けてより傾向が強まるという仮説2は支持されなかった。

研究2では、研究1で検討できなかった具体的な自我脅威場面を明らかにするために高自己愛者に対して面接調査を行い、自我脅威状況とその時の感情、また必要なサポートについて検討した。その結果、対人葛藤場面において怒りの感情が生起しているにもかかわらず、自己愛の高さによってサポートを希求できない状態にあったことが見出された。

両研究を通して、自己愛傾向がサポート認知に影響し、かつ自我脅威状況ではより大きく変動するという不安定性を示すことができ、またそれが影響している状況を面接調査の中で確認できた。これらは今後の研究でより詳細な検討を行っていく指標となるため、重要な結果であると考えられる。